

研究成果概要【Web 公開用】

所 属	公益財団法人文化財虫菌害研究所
氏 名	岩田 泰幸

※本様式はデータで提出してください

研究の名称	秋田県由利地域を主とした水生コウチュウ目・カメムシ目昆虫の生息・分布状況に関する研究
-------	--

関連分野	昆虫分類学、昆虫生態学、湖沼生態学、保全生態学、博物館資料保存論
------	----------------------------------

※研究分野（地質学／考古学／教育学等）について記載してください

対象フィールド	鳥海山・飛島ジオパーク
---------	-------------

※研究対象のジオパーク名（複数の場合は全て）記載してください

キーワード	水生昆虫、水環境生態系、絶滅危惧種、分布北限、外来種
-------	----------------------------

※研究に関するキーワードを 3 点以上記載してください

研究成果概要（A4 用紙で 1 枚程度）

本研究受託者らは、鳥海山・飛島ジオパークを主とする秋田県南部沿岸の由利地域において、絶滅危惧種や分布上特筆すべき種を含む水生昆虫（コウチュウ目、カメムシ目）に対する生息・分布調査を実施し、その高い種多様性や希少性、地域としての生物地理的な特異性を明らかにすることを主目的とした。これは、同地域の環境保全に資するための基盤情報の整備、提供にもつながる研究の一環である。

本研究により当該地域で確認された種数は、水生コウチュウ目では計 50 種、水生カメムシ目では計 28 種である。この中には、環境省レッドリスト 2020 あるいは秋田県レッドデータブックにおいて絶滅危惧 II 類に選定されている種が 10 種含まれていた。既出研究で示されているゲンゴロウ科以外に、分布情報が少ないコオナガミズスマシ（環境省：絶滅危惧 II 類、秋田県：情報不足）、クロホシコガシラミズムシ（環境省：絶滅危惧 II 類）、チュウブホソガムシ（環境省：絶滅危惧 II 類）が発見されている。

本研究を遂行する過程で、分布上特筆すべき種（北限記録を更新した種、これまでに東北地方でほとんど記録がない種、秋田県内の記録がないか限定される種）が複数確認された。学術的価値が高く早急に報告すべきと判断したものは、秋田県ジオパーク連絡協議会に相談の上、研究完了前から随時論文化を行い、公表を進めた。主なものは、以下の①～⑤である。

- ① 論文表題：秋田県におけるマルケシゲンゴロウ属（ゲンゴロウ科）2 種の記録（2026 年 1 月論文発行済）。本属は小型のゲンゴロウ科昆虫であり、複数の絶滅危惧種が含まれる。西日本に分布の中心をもつ種群であり、東北地方では記録がほとんどなかった。今回の調査でオニギリマルケシゲンゴロウとサメハダマルケシゲンゴロウを記録した。

- ② 論文表題：ホルバートケシカタビロアメンボ（カメムシ目，カタビロアメンボ科）の山形県・秋田県初記録（2025 年 12 月論文発行済）。本種は体長 2 mm 程度の小型のアメンボの仲間であり、秋田県・山形県から初めて発見された。現時点での本種の分布北限である。西日本では普通種だが、北限付近では生息状況に濃淡が見られた。
- ③ 論文表題：秋田県にかほ市で採集されたコミズムシ属（カメムシ目：ミズムシ科）3 種の記録（2026 年 1 月論文発行済）。コミズムシ属は体長 3～7 mm 程の小型の水生カメムシ目である。本報告でヒメコミズムシ、ハラグロコミズムシを県内から初記録した。
- ④ 論文表題：秋田県にかほ市で採集されたミズカメムシ科 2 種の記録（2026 年 1 月論文発行済）。ミズカメムシ科は体長 2～4 mm 程の小型の水生カメムシ目であり、同定が難しいグループである。今回、本科 2 種を秋田県から初めて記録した。
- ⑤ 論文表題：秋田県にかほ市で採集されたエサキナガレカタビロアメンボ（2026 年 1 月論文発行済）。本種は体長 2 mm 程の小型のアメンボ類の仲間であり、大型の湖沼の波打ち際や大河川中下流の緩流域といった水が緩やかに流動する水域に限って生息する特殊な種である。これまでに秋田県から記録はあったが、県南部からの初記録となる。

上記のような分布上特筆すべき種が発見される一方で水生昆虫類の生息に悪影響を及ぼすオオクチバスやアメリカザリガニの生息が確認された水域が各所で見られた。こうした外来種が侵入した水域の中には、特に大型種（大型のゲンゴロウ類）の生息が既に見られなくなっていたり、確認が難しかったりしたところが多かった。一方でマルケシゲンゴロウ属やエサキナガレカタビロアメンボのように、外来種が既に侵入している水域においても小型種については貴重なものが確認された。特に小型種についてはこれまでに調査が充分ではない分類群を含むことから、外来種の侵入水域でも新たに発見される種が今後も増えると予想される。

今回の調査で得られた標本類は、2026 年 2 月時点でも整理を進行中であり、整理が済んだものについては成果を論文としてまとめるに際して秋田県立博物館への一部収蔵を行った。現在整理中の標本については、整理が完了し全体を論文化した後に鳥海山・飛島ジオパークにおける教育普及、秋田県立博物館での恒久的保存のため、得られたすべての種においてその一部の標本を寄贈することを目標に作業を進めている。

今回の調査により、当初予想した以上に鳥海山・飛島ジオパーク付近における水生種の種多様性は高いと判断される。その要因としては、①全国で普遍的に生息する種がほぼ満遍なく確認できること（普通種の常在）、②東北地方など北部地域に分布の中心がある種が確認できること（北方系種の分布）、③元来の分布の中心がより南方（例えば、関東地方以南）の種が複数確認できること（南方系種の分布）、④やや特殊な地形的要素に分布する種が確認できること（希少種の存在）、⑤全国的に衰退傾向にある絶滅危惧種がいくつも確認できること（絶滅危惧種の残存）といった複合的要因に基づくと考えられる。すなわち、ゲンゴロウ科の既知研究で示されていたホットスポットとしての地域特性が、その他の止水性水生コウチュウ目やカメムシ目にも当てはまることが明らかになった。今後は、外来種が侵入しつつある水域においても積極的に調査を展開することにより、どういった種が残存しているか、あるいは消失しつつあるかの現状を把握することが大切である。今回の調査においても、外来種の侵入水域から分布上特筆すべき種が発見されたことから「網羅的な調査」の重要性を示すこととなった。